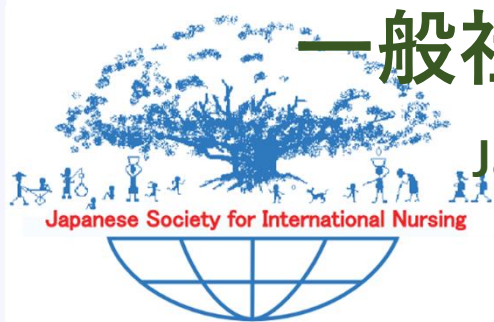




一般社団法人日本国際看護学会

Japanese Society for International Nursing

NEWSLETTER No.8, 2025

2025年3月発行

理事長挨拶

森 淑江 一般社団法人日本国際看護学会理事長
群馬大学名誉教授

1995年1月17日早朝に起こった阪神淡路大震災から今年で30年となりました。この大震災は、日本で生活する私たちにとっていろいろな意味で大きな転機となりました。（おそらく）多くの人が想像もしていなかった関西での大地震発生とその後に追い打ちをかけるように生じた被災地での火災、5,000人以上の多数の死者（919人の災害関連死を含めると6,434人）、一時は50万人とも言われた避難者、高速道路や一般道路、建物の損壊など、目の前で起こっているようにテレビの映像を通じて知った被害の大きさに国民は驚愕しました。しかし驚くだけでなく、誰もが被災した人々や被災地のために何かしたい、しなければという思いに駆られたことでしょう。これをきっかけに百万人とも言われるほど多くのボランティアが被災地に支援に向かい、1995年はボランティア元年と言われたこともありました。

私は1994年8月に中米ホンジュラスという国での国際協力を終えて帰国し、その5か月後に阪神淡路大震災が起こったのですが、その時に

すぐに思い出したのはホンジュラスで関わっていた准看護学校の教師や学生がハリケーンのような自然災害の発生時には、競うように支援に出かけていたことでした。

何かしなければと私も看護師ボランティアとして震災後の火災で大きな被害を受けた長田区鷹取の病院で9日間活動しました。

この病院での体験は、日本の一般病院で提供されている看護の現状を認識して日本の看護を見つめ直すきっかけとなりましたし、ボランティアとして活動していた看護師たちの優秀さに感心したりもし、多くのことを学びました。たぶんホンジュラスに派遣される前でしたら、自分が被災地で活動するなどとても思わなかったでしょう。

国際協力は、その後の人生を変える転機となりえます。現在、国際協力に携ってみようかどうかと迷っている方もいらっしゃると思いますが、国際協力活動は、相手側だけでなく、自分自身が大きく変わる契機となることをぜひ知っていただきたいと思います。



ボランティアとして活動した病院



ボランティアの仲間たち。
ボランティアの多くは病室に宿泊。

国際看護と私

国際看護に携わるきっかけやご経験、思いなどをご紹介します。

宮本圭
順天堂大学医療看護学部

1996年4月、ザイル（現・コンゴ民主共和国）の南キブ州州都ブカヴの大地にセスナ機で降り立った。私の国際協力の始まりだ。

翌日から、カレヘ難民キャンプ、カタナ難民キャンプに通った。キャンプの診療所では、ルワンダ難民の看護師やコミュニティ・ヘルスワーカー、地元のザイル人看護師、総勢70名程のスタッフと活動した。主な業務は、病棟管理だった。勤務表の作成や業務調整を行いつつ、看護師と一緒に重症マラリア患者のケア、褥瘡の処置、栄養失調児のケア、分娩困難な産婦や褥婦のケアを行った。またブルーシートで覆われた、サウナのように蒸し暑い病棟の環境を改善するためにロジ部門のスタッフに、急遽カッターでシートをくりぬき、木枠をつけて窓を設置してもらったり、村で日常的に入手できるパパイヤと砂糖を混ぜてイソジンシュガーを自作し、褥瘡処置を行ったりもした。

また、難民キャンプでの活動中は、世界食糧計画（World Food Program : WFP）を通じ難民の厳しい食糧事情を目の当たりにすると共に、難民流入や支援関係者の急増で物価が跳ね上がり、ザイル人の生活が困窮している現状も知った。その結果、反難民感情が高まり、現地の人々による道路封鎖や断水がたびたびあった。難民の帰還を踏まえた支援や、受け皿になっているローカルの住民の生活まで鳥瞰的に捉えた難民支援とは何か、簡単に答えは見つからなかった。そのうち1996年10月、ルワンダ軍がウガンダ軍と共にザイルへ侵略し、第一次コンゴ戦争が起こり、

国連機関やNGOのすべての人々がWFPの食糧輸送機で隣国ケニアのナイロビに退避した。私の所属するNGOはルワンダに移動し、帰還難民に対する移動診療や、数年来支援していた保健センターの機能強化、シェルター建築に取り掛かった。しかし首都キガリやその周辺の治安は悪化の一途をたどり、帰国となった。私の国際協力は1年で終わった。

その後、カンボジア王国の古都シェムリアップで地域精神保健プロジェクト、ドミニカ共和国の首都サントドミンゴの貧困地区で総合病院の看護師の現任教育に携わる機会を得た。

そして、私の国際協力のなかで最も長く関わることになるネパール王国（現・ネパール連邦民主共和国、以下ネパール）との出会いがある。国際協力機構（Japan International Cooperation Agency: JICA）のシニアボランティアとしての活動である。2006年4月から2回にわたり、バクタプル市が運営する専門学校看護学科で看護教育に従事した。20代から30代の同僚はみな優秀だったが、学科の運営・管理が上手く機能していなかった。また、教材も十分でないうえ、専門性が必要な助産や手術室看護の教科は教員には大きな負担となっていた。そこで、教員間に大きな差異を生じず、誰でも安全で標準的な技術指導ができるように教材を作成すると、近隣の看護学校からも要望があった。

国際看護と私

続 | 宮本圭_国際看護と私

この看護学科での活動が、3度目の派遣となる、ネパール看護評議会での看護師国家試験制度設置支援につながる。ネパール看護評議会が国家試験制度を必要とする背景には、2000年以降の看護教育のビジネス化に伴う教育プログラム急増があり、看護教育の標準化が急務だった。任期の半分に相当する1年目は政治的要因により準備は停滞したが、2年目に政権が交代すると一気に加速した。そのプロセスでは、一部の国家試験反対のグループから中止を狙って様々な圧力を掛けられ、事務所を武装警官に警護してもらったこともあった。各方面への調整や交渉を続け、2012年4月、第1回看護師国家試験を完遂した。任期終了1か月前のことだった。国家試験制度は続いており、2025年1月現在、第38回看護師国家試験の準備中である。

筆者は、国際協力を実践する直接支援のほか、後方支援も経験した。中東地域にあるJICA事務所の在外健康管理員の業務である。筆者の中東文化の知識不足や、アラビ

ア語ができないことに加え、メディカル・ツーリズムを行う医療事情がよい国で関係者にどこまでの治療を受けてもらうかの判断に苦慮した。また男性の医師・看護師が女性の患者を直接診察しない医療文化や看護職をはじめとする医療者の意識の違い、医療サービスの質の問題、等々、アジアとの違いにも悩んだ。もっとできることがあったのではないかと思う2年間である。

1996年から日本と海外を行ったり来たりして続けた国際協力は、筆者にとって何だったのか。国外で保健職として活動するための多様な知識・技術を得ただけでなく、常識を見直し、異なる宗教・信念や人々の生活を理解し、共に生きるためにすべきことを考え、学んだ時間だったように思う。現在は国内で教育に従事しているが、これまでの経験を糧に、今後も空の向こうにいる人々の生活を想像しながら、自らのおかれたところでできることをしていきたい。



写真1：ルワンダ難民の大量帰還
(筆者撮影)



写真2：ネパールの第1回看護師国家試験
(左が筆者、看護評議会撮影)

シリーズ

海外情勢 その1

海外をフィールドとした看護職の活動について幅広くご紹介します。はじめにJICA草の根技術協力事業で、顧みられない熱帯病対策に関わった専門家のお話をいただきました。

タテとヨコの繋がりを大切に ～顧みられない熱帯病 スナノミ症対策 in Kenya～

鈴木 佳奈

JICA草の根技術協力事業 専門家

長崎大学の熱帯医学研究所は2005年にケニアにプロジェクト拠点を設置し今年で20年、様々な熱帯病研究に取り組んできた。2021年からはJICA草の根技術協力事業「ケニア国ホマベイ地区における持続可能なスナノミ感染症対策プロジェクト」が始まった。ケニア西部に位置するビクトリア湖沿いの地域を対象にしている。ビクトリア湖は海のように広く多くの魚が生存しており、地元住民の心も身体も満たしている。

「顧みられない熱帯病」という言葉をご存知だろうか。予防や治療が可能であるにも関わらず、地域・国・国際社会から顧みられていないWHOが指定する21の疾患を指す。その中でもスナノミ症は「疥癬およびその他の外部寄生虫症」の“その他の外部寄生虫症”に含まれるため、疾患名すらも書かれていない。顧みられない熱帯病の中でも最も顧みられていない熱帯病と言っても過

言ではない。

スナノミ症は、砂に住む雌のノミが足などの皮膚に潜り込む寄生虫症である。死に直接至る病ではないが、痛み・痒みや患部の変形から歩行困難、そして見た目の悪さから「あの家族は呪われている」等と地域から噂され差別・偏見を持たれやすい。正しい知識さえ持っていれば、、、、そんな病である。スナノミ症は貧困と隣り合わせの病でもある。自宅の床を舗装したり、家畜とヒトの生活スペースを分けたり、靴を履くことも予防方法の一つと言われているが、いずれも貧困家庭では難しい。以前、スナノミ症患者へ靴をプレゼントしたことがある。数週間後に経過を確認するため再度訪問したがそこに靴はなかった。尋ねると、「靴は売ってその日の食糧に代えた」と話す。貧困の根深さと貧困の改善無くして行動変容は難しいことを痛感させられた。



写真1・2:スナノミ症患者の住居や生活の様子

写真3:スナノミ症患者の足

海外情勢 その1

続 | 鈴木佳奈_タテとヨコの
繋がりを大切～顧みられない
熱帯帯病 スナノミ症対策
in Kenya～



写真4・5:保健ボランティアへの研修の様子

次に、JICA草の根技術協力事業を通して感じられたスナノミ症対策におけるタテとヨコの繋がりについて説明したい。

本事業での主な活動は研修である。地域保健局と協同しカスケード方式に、患者の一番近くで働く民生委員のような方々（以下、保健ボランティア）まで正しい知識・予防法・治療法を伝えていく。保健ボランティアは今まで対応に困っていたスナノミ症患者に手を差し伸べることができると、研修の意義を感じすぐに行動に移してくれた。一方で地域保健局、そして保健省本部はマネージメントに回ることが多く、スナノミ症患者の現状をなかなか感じられていなかった（＝対策ができていなかった）。そのため私たちは、現場のリアルを地域保健局や保健省本部に伝える役目を粘り強く行い、ケニア国としてのスナノミ症対策に貢献してきた。これがタテの繋がりである。

また、ヨコの繋がりも欠かせない。本事業のみでできることには限界がある。これまで日本の企業やNGOだけでなく、海外のスナノミ症研究者、ケニアの地元のNGOや政治家など、多くのヒトや団体に働きかけスナノミ症対策を協働してきた。スナノミ症

は研究も足りていない。医学関連文献データベースのPubmedで、世界三大感染症のマラリアは116,000件以上ヒットするのに対して、スナノミ症はわずか390件である（2024年11月現在）。そのためタイムリーな情報交換が必要で、国を越えて多くのスナノミ症研究者と繋がり最新の情報を現場に届けることを心掛けている。ケニアの地元のNGOや政治家との関わりも重要視しており、お互いの強み弱みに合わせて分担しながら対策を進めている。これは、スナノミ症対策の持続可能性（私たちの事業終了後の継続性）を考え、大切にしているヨコの繋がりである。

最後に。元病棟看護師として本事業に貢献できることは何か、これまで考え実践してきた。一見看護とは離れているように見えるが、多職種連携や患者一人一人を全人的に見ていくことは、日本の病棟でも、ケニアの地域でも共通している。患者個人を看ながら、ケニア国のスナノミ症対策を考えていく。ミクロ・マクロ両方の視点を持ちながら現場に即した対策を今後も考えていきたい。



写真6・7:スナノミ症研究者らと共同で実施したケニア保健省本部へのスナノミ症研修

世界の現場を知る：JICA海外協力隊員としてのパプアニューギニアでの経験

中辻 祐介

山梨大学大学院修士課程（看護学専攻国際看護学講座）

① 任国や任地の様子は？

私の任地は、パプアニューギニアのキンベであった。キンベは、パームオイルの生産が盛んであり、広大なプランテーション農場が延々と続いている。ここで収穫し搾ったパームオイルが海外へ輸出される。そのため、パームオイルのプランテーションや林業などに職を求めて他州からやってくる人々も多い。また、パプアニューギニアでは、部族が800以上とも言われ、様々な文化や慣習が存在する国である。例えば、ワントクという概念がある。ワントクは、困っている人がいれば助けたり、持っているものを分け合ったりするのが当たり前であり、仕事がなくなった人を支えたり、食べ物やお金を共有することもありたりする。

これは、みんなが協力して生きていくためのルールのようなものである。パプアニューギニアではこういった多様な文化・慣習が息づく国である。

② 配属先はどんなところ？

感染症・エイズ対策隊員としての私の配属先は、西ニューブリテン州保健局の感染症対策の部局であった。キンベ州立病院の敷地内にあるこの部局では、結核、HIV/エイズ、マラリア、等の感染症防止のため活動を行っていた。同僚は、7人おり、医療職ではなく行政の職員で、それぞれが結核、HIV/エイズ、マラリア等の感染症を担当し、日本の保健所に近い業務に従事していた。



写真1:保健局が関わるイベントで民族衣装を着た子どもと一緒に撮影



写真2:同僚が道端で出会った子どもにポリオワクチンを接種している様子

海外情勢 その2

続 | 中辻祐介 世界の現場を知る：JICA海外協力隊員としてのパプアニューギニアでの経験

③活動内容は？

まず私が取り組んだことが、同僚からの希望があり配属先で紙ベースで管理されていたマラリア感染患者の情報をデータ化することであった。他にも、パプアニューギニアは、2000年にポリオが常在しない国と認定されたが、2018年4月下旬に6歳の男児の感染が判明する。そのため、私が赴任した2018年秋はポリオ予防接種キャンペーンで保健局スタッフが村を回りポリオワクチンの接種活動が行われていた。私はその活動について回ったり、小学校で手洗い指導や病院内やイベントでの糖尿病予防の啓発活動等を行ったりしていた。

④やりがい、苦労した点は？

海外の活動は、現地の人々と直接交流し、共に課題に取り組むことができる貴重な経験であった。その中で、互いに助け合い、意見を交わしながら進むプロセスが、私にとって大きなやりがいとなり、成長の源になった。

苦労したことは、日本と現地の常識のギャップである。例えば、保健局のスタッフが子どもにポリオの予防接種をした後に、その子の小指の爪にマジックで色を塗っていた。その方法に驚きつつも、スタッフに理由を尋ねると、「もう1回ワクチン接種が必要な

で、1回接種したという印だよ」と教えてくれた。マジックも特殊なものではなく普通のマジックである。日本では、母子手帳等に記載されるのが一般的だが、この地域ではそれらの手段は整っておらず、簡便なマジックで印をつけるという手法がとられていた。このように、現地の文化や環境に合わせた工夫を目の当たりにするたび、日本とは異なる課題や制約を受け入れながら活動する難しさを痛感した。しかし、異なる文化や背景を持つ人々との関わりを通じて、自分の視点の限界に気付かされることが何度もあり、それらの経験が、私の考え方を柔軟にし、今の私の基盤を築く重要な経験となったと言える。

⑤今後の予定は？

私は、看護学生時代から母校等で国際看護の楽しさややりがいを学生に伝えたいと考えてきた。これまでパプアニューギニアでの活動を経験し、現在は大学院で国際看護と研究手法を学んでいる。また今後JICAボランティアとしてウズベキスタンに派遣される予定である。そのため、将来的には、国際看護に携わる仕事に就き、非常勤で看護学校や大学で国際看護の授業を通じて、学生が海外への興味や在留外国人の看護に興味を持つきっかけを作れるようになりたい。



写真3:ポリオ予防接種キャンペーンで訪れた村

学会員活動の紹介コーナー

会員のみなさまが行う国際看護活動をご紹介します。

多文化共生時代に求められる医療環境 ～外国人患者と家族への情報伝達手段として取り入れた動画～

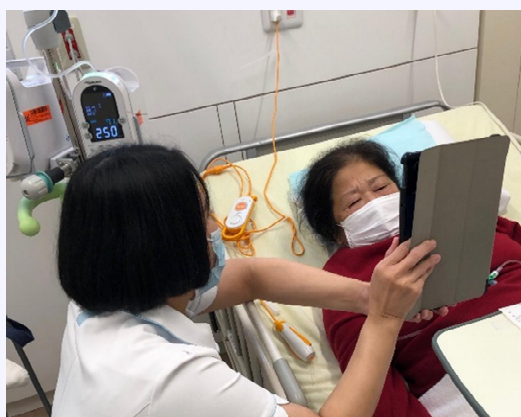
香川 沙由理
成田赤十字病院

成田赤十字病院は外国人患者を受け入れており、2017年には国際診療科が開設されました。2023年度の外来及び入院外国人患者数は8092人(延べ患者数)で、病院全体の患者の46人に1人が外国人患者という状況であり、2017年度と比較して約59%増加しています。受け入れている外国人患者は海外からの旅行者よりも日本で暮らす方が多く、海外からの旅行者が約7%、日本で暮らす外国人が約93%です。2023年度の外国人患者国籍割合は上位からスリランカ、ネパール、フィリピン、中国、タイで、入院している診療科は上位から産婦人科、内科、小児科、新生児科、整形外科となっています。

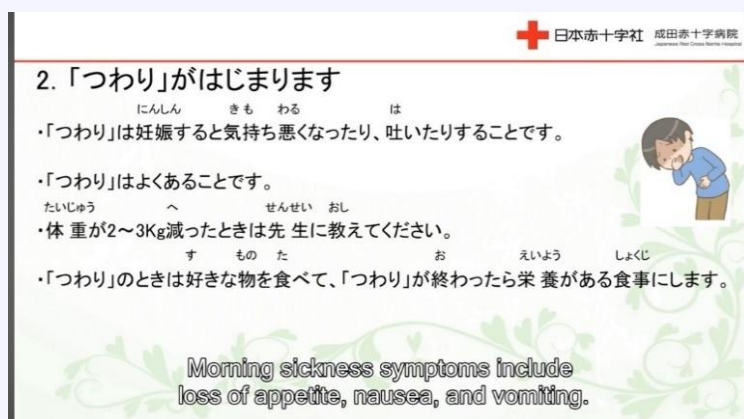
このような状況で外国人患者背景は多様化しており、何かを説明するにしても対応に柔軟さが求められるようになっていきます。しかしながら増え行く外国人患者の対応は限られた時間で行わなければならない、対応の工夫が課題とされてきました。そのため外国人患者の対応を行う職員で意見を出し合い、外国人患者への情報伝達手段として多言語の動画作成を行いました。動画は病院の受診方法、入院の注意点、妊娠出産、出産後の手続きに関わる説明など15テーマ、言語はやさしい日本語と外国語の併記にしてお

り対応言語は英語、シンハラ語、ネパール語、ベトナム語の4言語、計60本の動画を作成しました。動画にはやさしい日本語の音声が入り込んでおり、視覚・聴覚の両方から情報が得られるようにしました。動画の視聴は外国人患者が診察の待ち時間にアクセス情報を得ることができ、自宅で家族と情報共有することができるほか、職員が業務時間を有効活用できる利点があります。作成にはテーマの絞り込みや内容の検討なども含め1年以上の月日を要しましたが、外国人患者への情報伝達手段として活用されています。2023年12月からYouTube上で公開されており、QRコードを読み取るとアクセスでき視聴回数も増加傾向にあるため今後もさらに追加作成していく予定です。

外国人患者受け入れの環境整備は患者の安心安全につながるだけでなく、対応する職員の業務効率化にもつながります。外国人患者と職員のお互いにとって良い環境作りは重要であることから、今後も外国人患者対応に関わる職員と意見交換を行いながら病院全体で課題に取り組む姿勢を大切にしていかななくてはならないと感じています。



タイ人の患者に説明を行っている様子



妊娠中の身体の変化についての動画

第8回学術集会報告 1



学術集会会長報告

桑野紀子 一般社団法人日本国際看護学会第8回学術集会会長
大分県立看護科学大学

一般社団法人日本国際看護学会第8回学術集会は、「イーミックとエティックでつなげる国際看護—多文化理解は看護の発展にどのように寄与するか—」をテーマとし、2024年10月5日（土）、6日（日）の二日間の開催となりました。初の九州開催でしたが、おかげさまで115名のご参加がありました。遠方から、また、近隣県からも多くの皆さまにご参加いただきましたこと、心より感謝申し上げます。日本でも多文化化、多言語化が進んでいますが、地域社会の本格的な多様化はまだこれからと予測されています。世界情勢もかつてないほど目まぐるしく変化する中、国内外での看護活動、教育、研究、また身近な地域貢献について情報を共有し、活発な議論を重ねていくことの重要性をふまえ、企画・準備委員会の皆さまと話し合いながら学会

のコンセプトや構成を考えていきました。特にシンポジウムでは、イーミックな視点とエティックな視点から自己理解を深める機会にしたいと話し合い、「自己文化への理解を刷新する—より良いケアの実現のために—」というテーマで企画を進めました。

演題登録開始直後は演題数が少なくハラハラしましたが、おかげさまで最終的には27演題の発表があり、基調講演、教育講演、特別講演、シンポジウム、教育活動・研修委員会企画、研究委員会企画、および学生企画も開催することが出来、盛沢山な内容となりました。また、1日目、2日目のプログラム終了後にはそれぞれ懇親会、エクスカッションを企画し、交流を深める機会となりました。



写真1:特別講演 第一会場にて



続 | 桑野紀子 学術集会会長報告

基調講演では、あらためて「イーミックスとエディック」の視点に関する内容を整理し、その重要性や有用性についてお話しさせていただきました。教育講演では、看護における文化コンピテンス、文化をアセスメントするという視点で、通訳者としてのご経験が非常に豊富な渡部富栄先生（大東文化大学）にご講演いただきました。特別講演では、西園晃先生（大分大学）にご登壇いただき、「Travel vaccine と Life course immunization」というテーマで、生涯を通じた予防接種という考え方、その意義・効用について、分かりやすくお話しいただきました。JICA海外協力隊活動報告会では、3名の方から看護活動の経験を共有いただくことが出来、メッセージ動画もご提供いただきました。教育活動・研修委員会および研究委員会の皆さまには、学術集会テーマに沿った興味深い企画を実施いただきました。一般演題

は6群20演題の口演と4演題のポスター発表があり、活発な質疑・ディスカッションが行われました。いくつかのプログラムが同時並行で行われるのは学会の常ですが、どれも聞きたい、と迷った参加者の方も多かったのではないかと振り返っております。内容の詳細は学会HPをご参照いただければ幸いです。

ご参加くださいました皆様、ご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様にあらためて感謝申し上げます。

尚、本学術集会は大分市観光協会から助成金をいただいたことを申し添えます。大分県は別府や湯布院に代表される「おんせん県」であり、海・山の幸の「味力も満載」です。本学会へのご参加を機に、またいつか、大分県を訪れていただければ幸いです。



写真2:シンポジウムの様子



写真3:一般演題 口演の様子

第8回学術集会報告 2

学部生の成長の機会ともなった第8回学術集会を振り返って

篠原 彩 一般社団法人日本国際看護学会 第8回学術集会企画・準備委員
大分県立看護科学大学看護学部

本学の国際看護学研究室の桑野紀子教授が大会長を務める第8回学術集会が大分で開催されることが決まり、私は企画・準備委員として参加する機会を得ました。桑野先生と準備を進める中で、学部生に発表の場を提供したいと思い、それが「多文化理解って何だろう」という学生企画となりました。この企画では、同年夏に実施された国際研修や国際交流プログラムに参加した学生が、自らの経験を振り返りながら、多文化理解についての考察を発表しました。その後、来場者とともにディスカッションを行い、意見交換を深めました。学生たちは発表内容を整理し、自分の経験を他者にわかりやすく伝えるとともに、その経験を基に多文化理解に関する自らの考えを深めることができたと思います。当日は学生たちがファシリテーターとして進行を担当し、ディスカッション後のまとめも行いました。学生らしい司会進行ではありましたが、ご来場の皆様のご協力のもと、無事に企画を終了することができました。発表後、学生たちの達成感に満ちた表情を見て、このような発表の機会を設けたことが非常に有意義だったと感じました。

また、今回の学術集会では、学部生がボランティアとして会場運営に携わりました。事前に一度打ち合わせを行っただけでしたが、自分たちの役割をしっかりと理解し、当日の変更にも

柔軟に対応してくれました。普段の大学での姿とは異なり、真剣に運営に取り組む学生たちの姿は非常に頼もしく感じました。学術集会終了後、本学の教員からボランティアで学術集会に参加した学生が、積極的に卒業研究に取り組むようになったという報告がありました。今回の経験が学生たちにとって、研究発表を直接聴く貴重な機会となり、その経験が思いがけず良い影響を与えたことがわかり、大変うれしく思いました。

さらに本学術集会では、指導しているゼミ生が卒業研究の一部を発表しました。緊張している様子が見受けられましたが、質問に対し自分の言葉でしっかりと考えを述べる学生を見て、とても誇らしく思いました。発表の準備を通して、研究に対する学生の意識が徐々に高まっていったのを感じました。発表後もその意識を持ち続け、能動的に卒業研究をまとめることができました。

このように、第8回学術集会は様々な場面で本学の学部生たちの成長を実感することができました。この貴重な機会をいただけたことに、心より感謝申し上げます。

末筆となりましたが、今後の一般社団法人日本国際看護学会の益々の発展を祈念しております。この度は、誠にありがとうございました。



写真1:学生企画のディスカッションで出した意見をまとめる学生たち



写真2:卒業研究の一部を発表後、質問に答えるゼミ生

お知らせ

第9回学術集会のご案内

ワンヘルス・アプローチに基づく国際看護戦略

International Nursing Strategies Based on the One Health

日程: 2025年9月6日(土)・7日(日)

会場: 神奈川県立保健福祉大学 (神奈川県横須賀市平成町1-10-1)

学術集会長: 松永早苗 (神奈川県立保健福祉大学)



紹介動画

学術集会事務局: 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター内 (横浜市旭区中尾1-5-1)

Email: kokusaikango2025@gmail.com

第9回学術集会HP: <https://x.gd/Z0hgH>

私は、この度、一般社団法人日本国際看護学会第9回学術集会長を拝命しました松永早苗と申します。私は、感染管理認定看護師として後進の育成と実践現場において感染対策ならびに研究を行っています。私たちは、新型コロナウイルスパンデミックの経験を通して、人、動物、環境を含めた「健康管理」の必要性を実感しました。ワンヘルスとは、人、動物、環境に関わる者が協働して健康問題に取り組むこととして、世界的に広がっている考え方です。この考え方は、感染症の看護以外においても、非常に重要です。世界の人口は近年、減少傾向にあります。その中でも、いまだ収まらない戦争や紛争が、人、動物、環境へ悪影響を及ぼしており、さらなる人口減少へと導いています。世界において、貧富の差が広がり、人、動物、環境が健やかであることが阻害されています。国際看護を担う私たち看護職は、ワンヘルスに基づく方法を取り入れ多角的に看護の戦略を考える必要があると考えています。第9回の学会は、「ワンヘルス・アプローチに基づく国際看護戦略」をテーマに、人、動物、環境に関わる看護戦略を学ぶことができるプログラムを計画中です。

第9回学術集会は、異国の情緒あふれる横須賀の地で実施します。自然豊かな横須賀の観光も、ぜひ楽しんでください。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

一般社団法人日本国際看護学会第9回学術集会長 松永早苗



会員の皆様からの記事 大募集！

ニュースレターに掲載する会員の皆様からの「**国際看護に関する記事**」を募集します。テーマは自由で、在日外国人支援、国内外での国際看護活動、国際看護学等の教育活動やツールの紹介など、幅広く歓迎します。

お問い合わせ

ご興味のある方は、下記連絡先までお気軽にご連絡ください。

広報委員会 代表メールアドレス：pub-re@jsin.jp